

戦争を風化させるな

出版記念討論会を開催



戦争体験談を話す永田理事長

若者を再び戦場に送らないために、

参加していただける運びとなりました。

討論会当日、新たに数

の元に戻ることなく、遠い

「戦争」の姿と、今回の

私を含め多くの若者は

「もう二度と戦争はした

学校の授業では決して

「戦争を風化させるな」

今回の出版記念討論会

過去の戦争の清算も終わらぬまま(先の大戦での戦没者遺骨未収集は100万枚以上)、「戦争の出来る国づくり」に動いているこの国に対する警鐘と、平和への願いが込められています。

本出版を契機として、多くの方々に戦争体験者の「生の声」を伝え、また日本の現状を認識していただき、そして話し合える場ができればと考

え、2004年6月19日(土)、石橋文化センター共同ホールにて「戦争を風化させるな」出版記念討論会を開催しました。

当日は、学生や一般市民の方を含め約300人の参加があり、入り口に展示した戦没者の遺留品等にも多くの方が興味を示されていました。

当NPO法人では戦没者の遺骨収集・返還活動に対する議員連盟の呼びかけを全国会議員(超党派)に要請しています。この議員連盟に賛同いただ

いている方々(約50名)に出席のお願いをしたところ、3名の先生方(民主党古賀一成衆議院議員、民主党川内博史衆議院議員、社民党 眞雄参議院議員)にも来賓として

討論会には、永田勝美理事長による主催者挨拶の後、7名の執筆陣から講演形式で執筆内容に沿った形で進めました。まず、川副正敏弁護士から法律家の観点から、昨今の日本の危惧すべき情勢を訴えていただきました。

続いて、戦争体験者(永田勝美氏、津留崎尚氏、三島重人氏、高田俊秀氏、土手本武義氏)の方々が、戦争が如何に悲惨なものか、そして命がどれだけ尊いものかをお話いただき、最後に塩川正隆副理事長から、遺骨収集・返還活動を通じて「過去の清算」に対するお粗末な国政への「怒り」と戦争国家へと向かいだしたこの国に対して「未来への危惧」を涙ながらに訴えていただきました。

その後、参加者の方々から積極的に「戦争への道は止めさせるための方策はあるか?」等の質問や、NPO法人の活動に対する賛同、意見をいただきました。また、中国帰国者の会の方々から、急遽要請があり、現状報告と活動に対する理解を訴えられました。

事務局 高木 一希

今回の討論会は、若い方々の参加も多く、非常に有意義なものになったと感じます。討論会終了後も執筆陣の方々に戦時中の状況等について話をしている光景が多く見受けられました。また、たくさんの方々にご記入いただいたアンケートのご意見・ご感想は、当NPO法人の今後の活動に活かして行きたいと思っております。ご協力ありがとうございました。

「わが子を戦場に送らないために」

遺骨が戻らないことに対してあきらめているのか、若しくは問題意識さえ持っていないかと思えます。しかしながら、この講演会に参加しお話しを伺ったことで、多くの若者が事実を知り、しなければならぬ事を実感したと思えます。遺骨の収集活動に参加すること、難しいかもしれませんが、戦争を推進している国に対し「否」という信念を持ち、今回お話しいただいた事実や想いを後の世代へ繋いでいくことが大事であると多くの若者が感じたのではないのでしょうか。

私は2人の子供がいまして、この子供達が若者世代となるにはまだ10年ばかりです。この子供達が決して戦争に行くことのない様に、決して戦争を容認することのない様に、私は2つの事をやらなくてはなりません。

1つは今回の講演会でお聞かせいただいた事柄を話して聞かせてやる事、それからもう1つ、「戦没者を慰霊し平和を守る会」の活動に微力ながら参加させていただくこと、この2つです。この度、このような機会を与えていただき本当にありがとうございます。

「戦争を風化させるな」

河野 大樹

その時は、本の中に書いてあった牧師のお話を思い出しました。人は自分の身に危険を察知しないと行動に移さない、しかし、その時はすべてがあまりに遅すぎた。私自身のこのように思いました。討論会に参加して、諸先輩方から学んだ事をフィードバックし続けていかなければ、その時は、私自身が「赤紙」を手手にしているのでしょうか。やはり自分自身が立ち上がって、行動に移さなければならぬと考えさせられました。まずは私の意識を、そして周りの意識を一緒に変えていこうと思えました。今回、討論会に参加させていただいた事を感謝いたします。



討論会に参加した多くの若者

出来ることからやってみる

善家 健一郎



私は高校を卒業するまで両親、祖父母、姉、弟の7人家族で育った。毎晩、家族団欒のひと時は我が家であつたひとつのテレビを父が独占し、ニュースや演歌ばかりを

の部屋に「逃亡」した。祖父は私達に字を教えた。昔話を聞かせた。戦争の話もよく聞いた。祖父はおもむろにシャツを脱ぎ、銃弾が貫通した肩を見せてくれたりした。祖父があまり口にしな

祖父があまり口にしなかつたことを聞くことができた。戦争の悲惨さがひしひしと伝わってきた。今まで私が抱えてきた戦争のイメージは白黒の映像みたいになんともなくぼんやりしていた。それがセピア色からカラーに変わり、だんだんはつきり見えてきたような気がする。

「戦争を風化させるな」

持山 美奈子

20年以上経って、今回職場の方のお誘いで出版記念討論会に参加しましたが、戦争関係の映像や話を聞くのが苦手となっていた私には少々不安を抱えての参加となりました。討論会の中で会の活動内容や体験談を聞くなかで、戦後60年を迎えようとしている現在もなお160万人分の遺骨を遺族の元に還せない現状、調査活動の中で遺留品を遺族(本人)にお届けすることができたことのお話は、今の私に何が出来るのか?そんな問いかけに変わりました。そして戦争についての新たな発見がありました。もし、私の家族にその

出来ることからやってみる

私の中で「戦争と平和」を考へる原点といえば、小中学校の修学旅行でした。小学校では長崎、中学校では広島を訪れ、平和学習中の修学旅行を体験しました。長崎の原爆資料館で見た写真や遺留品は、幼少の私にとって、戦争の恐ろしさや悲惨さ、そして決して再び繰り返してはならないと

「戦争を風化させるな」

私の中で「戦争と平和」

「戦争を風化させるな」

持山 美奈子

20年以上経って、今回職場の方のお誘いで出版記念討論会に参加しましたが、戦争関係の映像や話を聞くのが苦手となっていた私には少々不安を抱えての参加となりました。討論会の中で会の活動内容や体験談を聞くなかで、戦後60年を迎えようとしている現在もなお160万人分の遺骨を遺族の元に還せない現状、調査活動の中で遺留品を遺族(本人)にお届けすることができたことのお話は、今の私に何が出来るのか?そんな問いかけに変わりました。そして戦争についての新たな発見がありました。もし、私の家族にその